オールド・レンズによる表現 2022

Expression by the old lenses 2022

市川治郎

ICHIKAWA Jiro

キーワード
オールド・レンズ、表現

Keywords
The old lenses, Expression

In 2022, the fight against the new coronavirus continues all over the world. Although desperate new drug development and preventive measures have been taken with the wisdom of humankind, the values we have built up continue to fluctuate significantly. Although in an emergency, cultural activities such as holding art exhibitions are recovering. Art activities, such as the announcement of the production of works of art, are being resumed, albeit with many restrictions. Under these circumstances, I conducted expression research on the theme that continued from last year. I would like to report it below.

はじめに

2022 年においても、世界中で新型コロナウイルスとの闘いが継続されている。人類の叡智をかけた必死の新薬開発や予防措置が講じられているものの、私たちが築き上げてきた価値観は大きく揺らぎ続けている。

非常事態下ではあるが、美術展覧会の開催など文化的な活動は回復しつつある。美術作品の制作発表のような芸術活動も、多くの制約を受けながらではあるが再開されつつある。

このような状況の下、昨年に引き続くテーマにより表現研究を行った。以下にその報告をしたい。

1. 表現の意図

最新式の光学レンズと比較して明らかに性能の劣るオールドレンズを用いた表現である。

今回は焦点距離 35 ミリのオールド・レンズを複数用い、それぞれの描写の違いを比較することとした。

使用した各レンズはそれぞれ製造より数十年を経ており、使用状況や保管状況の違いから、単純に性能を比較することはできない。

通常新品で購入した場合の光学レンズでは、製品ごとに性能面のバラツキが生じることのないよう注意深く検査されている。しかし製造後数十年を経過し、その間様々な人々の手を経由すると共に、どのように保管されていたかも不明なオールド・レンズでは、レンズ表面の拭き傷やガラスの曇り、あるいは発生したカビなどの影響により、ダメージを受けていることが多い。そもそも当時の光学レンズは、現在のようにコンピュータによる複雑な収差除去の設計などできなかった。したがって、たとえ保存状況が完璧であったとしても、現代レンズのような高精細な描写力を期待することはできない。

ところが近年になって、あらためてオールド・レンズによる撮影を試みる若者が増えているという。それは全てをシャープな写真として写しとるだけではなく、柔らかさとか緩やかさのような、優しい表現を求める傾向といえるかもしれない。それは数十年前とはいえ光学レンズの性能向上を狙った設計者の意図からは外れていることなのかもしれないが、何事にも誤差の許容されない現代ではむしろ、その緩やかさが尊ばれているようである。

2. 撮影に使用した機材

以下に、撮影に使用したレンズ及びボディを示す。

fig.1 COLOR-SKOPER 35㎜ F2.8（1999年製造）

fig.2 New Summaron 3.5㎝ F3.5 （1958年製造）

fig.3 Summaron 3.5㎝ F3.5 （1954年製造）

fig.4 W-NIKKOR・C 3.5㎝ F3.5 （1950年製造）

fig.5 Elmar 3.5㎝ F3.5 （1936年製造）

fig.6 Leica TL Body （2016年製造）

3. 作品と解説

以下に、製造年の新しい 35 ミリレンズから順に、絞りを開放値及び絞り込んだ状態で撮影した画像を示す。使用したレンズは全て 35 ミリフィルムカメラ用であり、APS-C サイズのデジタルカメラボディに各レンズマウントアダプターを取り付けて撮影した。従って実質的な焦点距離は 35 ミリ判換算で 50 ミリ→ 76 ミリ、35 ミリ→ 53 ミリ、75 ミリ→ 114 ミリ、135 ミリ→ 206 ミリ相当である。

fig.8 と fig.9 は基本的に同一レンズといわれるが、開放時のボケ具合を比較すると、かなり異なった描写を見せている。

これらの撮影は、あくまでも各レンズの現状から、何らか新しい表現のヒントが得られないかという実験的な試みである。

fig.7 COLOR-SKOPER 35㎜ F2.8（F2.5開放）

fig.8 New Summaron 3.5㎝ F3.5（F3.5開放）

fig.9 Summaron 3.5㎝ F3.5（F3.5開放）

fig.10 W-NIKKOR・C 3.5㎝ F3.5（F3.5開放）

fig.13 New Summaron 3.5㎝ F3.5（F8）

fig.11 Elmar 3.5㎝ F3.5（F3.5開放）

fig.14 Summaron 3.5㎝ F3.5（F8）

次は、光学レンズのもつ性能が最もバランスよく発揮される絞り値F8で撮影した画像である。

fig.12 COLOR-SKOPER 35㎜ F2.8（F8）

fig.15 W-NIKKOR・C 3.5㎝ F3.5（F8）

fig.16 Elmar 3.5㎝ F3.5（F9）

以下に、各レンズを開放値で撮影した中央部分の拡大画像を示す。

ピントは手前の金属製小像に合わせたが、周辺部の腕時計と布製小像附近になると、古いレンズほど平面性が劣るためか収束性が悪くなり、画像が乱れている。

拡大以外の修正は行っていないので、製造年の新しいレンズほど色彩の再現度や鮮明度が高く感じられる。

fig.17 COLOR-SKOPER 35㎜ F2.8（F2.5拡大）

fig.18 New Summaron 3.5㎝ F3.5（F3.5拡大）

fig.19 Summaron 3.5㎝ F3.5（F3.5拡大）

fig.20 W-NIKKOR・C 3.5㎝ F3.5（F3.5拡大）

fig.21 Elmar 3.5㎝ F3.5（F3.5拡大）

まとめ

オールド・レンズの光学的性能は、現在生産されている製品には全く及ばない。しかし、オールド・レンズには不思議な魅力がある。

それは日常生活で使われることの少ない和装に、日本文化の伝統や豊かさを感じ取る感覚に似ているかもしれない。

それは言葉には表せないが自然に醸し出される雰囲気のような魅力であり、私にとって芸術的な価値の一端でもある。